特集にあたって

土佐雅彦

日本独自の製鉄法として、江戸時代に盛行した「たたら（鑪）吹製鉄」がよく知られている。一般的なイメージとしては細長い西洋風呂のような形をした炉を粘土で作り、「砂鉄」と「木炭」を原料として、炉の長辺両側から扇形に並べた送風管を通じて強い風を送り続けて燃やし、三日三晩ほどで「鉧（けら）」と呼ばれる大きな鉄の塊を取り出す（実際には「銑（ずく）」と呼ばれる銑鉄を流し取ることも多い）といったところであろうか。さらに、その送風のため「天秤鞴（ふいご）」という強力な踏鞴が使用されたことや、炉周辺の防湿のために地中深く綿密な防湿施設（床釣）が整備されたこと、製鉄場を覆う特徴ある「高殿」建物があったことなどをご存じかもしれない。

中国山地の東端を占めるここ播磨でも、明治初期までたたら吹製鉄が盛んに行われていた。「千草鋼」や「宍粟鉄」のブランド名で、とりわけ日本刀の刀工たちに愛用されていたと伝えられている。室町時代まで遡ると『蔭涼軒日録』長享二年（一四八八）八月二二日条に、「一昨日長船勝光・宗光一党、自備前上洛、凡六十員、千草鉄廿駄、人数百人許有之」とあり、「千草鉄」のブランド名がここまでたどれる。さらに、鎌倉時代末期、正中二年（一三二五）に作刀された現宮内庁蔵の刀剣銘に「播磨国完粟郡三方西造之」とあることから、比定地の宍粟市波賀町南部で製錬された鉄素材がそのまま使われたのではないかと推定されている。奈良時代の『播磨国風土記』にも産鉄記事があり、播磨の鉄生産は古代・中世・近世を通じて連綿と受け継がれてきたものと考えられる。

しかし、他の地方より廃絶時期が早かったこともあり、いつしかこの地での鉄づくりという重要な営みが埋もれようとしていた。太平洋戦争中からそうした状況を憂い、再びその姿に光をあて、播磨の鉄

をよみがえらせようと努める先人達がいた。遺跡を歩き、文献史料を集め、民俗伝承を丹念に聴き取ってくれた先人達の情熱が、天児屋鉄山跡・たたらの里学習館の整備へとつながっている。詳しくは本特集の大槻論文をご一読いただきたい。いまひとつ、戦後歴史学の研究動向との関わりで、社会経済史上、鉄及び鉄器生産の果たした重要な役割を実証的に解明しようとする研究が本格化する。近世たたら吹製鉄は中世以前のどこまで遡ることができるのか、それ以前の製鉄法はあるのか、そもそも日本で鉄の生産が始まるのはいつからか。こうした視点を考古学で追究していた岡山大学の和島誠一氏らは、一九五〇年代半ば、岡山県月の輪古墳や福本製鉄遺跡などを調査し、千種地域にも早くから足を踏み入れている。高保木製鉄遺跡の調査はそうした文脈でも語られよう。

さて、播磨のたたら・製鉄遺跡の分布は北西端の現佐用町・宍粟市域にほぼ限られる。『播磨国風土記』には讃容郡と宍禾郡に産鉄記事がみられ、出雲や吉備地方等とならび奈良時代から国家に調庸鉄鍬を納めた有数の地域であった。藤原京大官大寺出土木簡中に「讃容郡駅里鉄十連」とあり、本特集の村上論文が鉄貢納の実態について深めてくれよう。日本の製鉄遺跡は、今のところ六世紀中葉頃には吉備地方などで確認することができる。近世たたら炉の系譜はほぼその時期まで長方形箱型炉としてたどることができ、それ以前に鉄鉱石を小割して原料とする筒型炉とも称すべき小型竪炉がみられる。讃容郡鹿庭山（現大撫山）の産鉄記事にはその開発者が和気一族とする記述もあり、吉備地方との関係を考慮すべきかもしれない。地質学的に山陽帯に属する佐用火山岩帯（安山岩）は高チタン（赤目）砂鉄を包含しており、一九八四年、金屋中土居遺跡で長方形箱型炉三基が発掘調査されて以降、多くの製鉄遺跡が調査されている。分布調査の成果などから大撫山周辺での製鉄活動はほぼ古代で終焉するようである。

一方、宍粟市千種町・波賀町・一宮町域を東西に横断して分布する山陰帯に属する花崗岩・花崗閃緑岩は低チタン（真砂）砂鉄を包含している。中世・近世へと播磨の鉄を作り続けたのはこの地域であった。一九七二・三年、現佐用町（かつては宍粟郡三河村）西下野製鉄遺跡が発掘調査され、長方形箱型

炉五基からなる奈良時代初頭の製鉄遺跡として研究史的にも注目された。先立つ一九六八年、和島氏らが千種町高保木製鉄遺跡を調査しており、二地点で長方形箱型炉の地下構造四基を検出した。後年、一九八九年に刊行された報告書では「中世的な歴史的位置」と総括されている。一九九〇年代に入ると波賀町小野段林遺跡、一宮町安積山遺跡、山崎町小茅野後山遺跡など、次々と調査例が増加してくる。筆者は、播磨における中世的段階の炉床下地下構造を整理し、「粘土帯ブロックを炉の長側辺に沿って堤状に区画し、その内部に木炭を敷いて、原初的本床とする播磨型」を設定したことがある。日名倉山南麓の佐用町滝谷U遺跡にもその類例を求めることができる。残念ながら明確な時期を示す播磨の中世製鉄遺跡は見あたらないが、段階的に地下構造を発展させていったと考えている。波賀町で実施した分布調査では、小野段林遺跡をはじめとして中世以前に遡るとみられる製鉄遺跡を一七カ所で確認している。宍粟市全体でみれば、近世たたら遺跡に混在してなお相当数が埋もれているものとみられる。本特集の田路論文が近世たたら遺跡を含め、最新の調査情報を提供してくれよう。

近世への橋渡しとして、播磨のたたら吹製鉄が戦国期に開始されていたとする伝聞がある。文政二年（一八一九）、山田吉睦の『古今鍛冶備考』「鉄山略弁」中に「中古天文の頃より始まる播州宍粟郡千草の鉄山において白鋼を吹く法」として床釣りの構造や操業法などが紹介されている。その当否はともかく、赤松氏やその末裔がこの地で製鉄業と関わっていたのは十分想定できる。

さて、播磨の近世たたら文献研究は、大槻論文で紹介されている宇野正碵氏によるところが大きい。氏の研究を支えた重要な史料に「播州宍粟郡須賀村山方御役所附　前々より勤方覚書」がある。安政六年（一八五九）と成立は新しいが、「鉄山稼」の概要について契約方法などを含めて記述している。宍粟郡での鉄山経営は寛永二年（一六二五）、第二次池田藩時代に設けられた「鉄山并雑木座の制」にまで遡ることができるという。播磨での「鉄山」は鉄製錬に不可欠な大炭を焼くための山林をさし、その一画に高殿を備えた山内（製鉄村）を設けた。砂鉄を採る「鉄砂流場」は一鉄山に六口まで認められて

いる。周辺の富裕な商人たちに運上を納めさせ、三～五年単位で請負稼ぎをさせていた。「鉄山諸道具一式同小屋并鉄砂流山諸道具同小屋共御公物」とある史料があり、鉄山稼ぎの諸道具は山内者（製鉄集団）とともに藩などから貸し出す形式がとられていたようだ。実際の運上請負例は第三次池田藩が誕生する慶安二年（一六四九）、千草屋がししはい山・うつのミ山（宍粟市波賀町）で稼業した記録の頃からたどることができる。この年、千種町などはいち早く天領に組み込まれており、幕府が播磨の鉄に関心を寄せていたことが推察される。やがて、延宝七年（一六七九）、宍粟郡北部二万石は天領となり、生野代官所支配下の須賀村山方役所が一括して宍粟の鉄を掌握するようになる。複数の請負人の中から抜け出し、以後、宝暦年間まで百年あまりこの地の鉄山をほぼ独占するのが千草屋である。山崎城下の平瀬家に伝わる古帳面を宇野氏らが発掘し『千草屋手控帳』と命名して世に紹介したのは一九六八年であった。著名な『鉄山必要記事』に匹敵する史料ともいわれ、この度、本特集の伏谷論文が改めて翻刻し、解説をつけて公刊する。当「たたら製鉄研究班」の結成後、兵庫県立歴史博物館に『宝暦六年鉄山一件』が所蔵されていることが分かった。山方役所が宝暦六年（一七五六）から寛政六年（一七九四）までの鉄山稼契約関係文書をまとめたもので、まさに当研究班に分析を委ねられたような発見であった。宇野氏らが収集してきた史料を裏打ちする文書もみられる。本特集の笠井論文に期待していただきたい。

最後に、この地域の史料上の近世鉄山（鑪）名は四十数例を数えるが、分布調査で確認できる近世たたら遺跡はそれより多い。波賀町南部にも近世たたら遺跡は分布するが、文献研究等から具体的な鉄山名が不詳である。稼業時期がさらに遡るためか、領地支配の複雑な変遷等に起因して史料が見当たらないのか、解明すべき課題が残されている。宍粟市の山々を歩けばいたるところで鉄にまつわる遺産に出会う。本特集に西岡宍粟市教育長から市内のたたら製鉄遺跡の活用について寄稿いただいている。この地に刻み込まれた鉄づくりの営みを今に生きる人々に広く知ってもらい、その解明のため労苦を重ねられた先人達を顕彰することが、当研究班の大切な役割の一つであると考えている。